

第3章 西日本出土の浮線紋土器

三好 孝一 〔(財)大阪文化財センター〕

1. はじめに

縄文時代晩期後半、近畿地方で設定された船橋・長原式土器に代表される凸帯紋系土器が汎西日本的に分布する時期から弥生時代前期にかけて、極めて稀ではあるが、中部・関東地方に発達した浮線網状紋（以下、浮線紋と呼称する）とされる紋様を施した土器が西日本でも出土することが確認されている。

畿内地域に弥生時代前期の土器様式が定着する時期、この地域以東にも遠賀川系土器が急速に浸透することが明らかにされている。また、これ以降の西日本では、各地方における地域色の萌芽が認められる弥生時代前期新段階を迎え、これ以前に浮線紋土器もその隆盛を過ぎることから、浮線紋土器の西方流入という事象は極めて一過的なものと考えられる。それゆえに、浮線紋土器を詳細に観察することにより、その細分を縦軸（時間）、地域的分布を横軸（併行関係）として捉えることが、各地域でこの時期分布する土器型式の併行関係を把握することに対し、有効な手段と捉えることができ得ると考えた。

今回の小阪遺跡の発掘調査においても弥生時代前期の土器などと共に2点が出土し、新たな資料が加わったことを契機として、以下に先学の研究成果をふまえ、類例を含めた形での時期的、また、併行関係についての検討を行うこととしたい。

なお、浮線紋土器の細分、分布地域の把握に関しては、近畿地方以西ではまとまった資料に乏しく、各地域に分布する土器型式に対し従属的出土状態を示している。それゆえ、新たに分類する術がないため、ここでは、中部地方を中心に東海、近畿以西の資料を器形、紋様から分析し、編年の位置づけを行った石川日出志氏の論考（石川1985a）、関東地方を中心に、中部地方におよぶ紋様を分析し、各地方の併行関係を追求した田部井 功氏の研究成果（田部井1985）を参考として、両者の論考に則った形で論を進めて行くこととしたい。

2. 浮線紋土器の系譜と細分

浮線紋土器の特徴は、その紋様描出技法に読み取ることができる。即ち、器壁に対し、その上下縁を一段低く形づくり、さらにその中に細線を引くことによって紋様を表現するということである。表出された紋様は、器壁に対し陽出されたものとなる。南部東北から中部地方に広く分布し、この陽出技法を施紋の特徴とする一群の土器に対し、その成立と系譜を明らかにすべく論及したものに、以下の論考が見られる。ひとつには、浮線紋に着目し、大洞C₂式の工字状紋と杉田C類土器からの紋様変化とし、大洞A式併行の時期の土器と位置づけようとする考えや（杉原・戸沢1963）、同時期各地域に分布する工字紋を基本とした土器からの系譜を辿ろうとする考え（西村ほか1965）がある。また、長野県下で出土する資料を分析し、散発的ながら大洞A式類似の工字紋が出土すること、浮線紋土器とその土器の分布地域が重なることから、その出自を同紋様に求める考えを示し、西の突帯紋土器群、中部地方を中心として広がる複数型式を包括した浮線紋土器群、東北地方中・北部の亀ヶ岡式土器群の3つの大きな土器型式分布圏のなかで捉えようとする見解（石川1985a）も見られる。これらは、工字紋を基調とする点では基本的に同一とみなされよう。さらに、上記の見解を発展させたものとして、氷I式土器を設定した永峰氏が、中部地方の佐野II式土器がそのまま変化したのではなく、新たに大洞A式や西日本の土

2. 浮線紋土器の系譜と細分

器型式の影響を受けて成立したものとする見解（永峰1969）がある。これは、突帯紋土器分布圏と対峙する工字紋、変形工字紋を中心とする関東地方千網式土器の土器文化圏と位置づけるものである。

このほか、西日本との関係を論じたものには、汎西日本的に形成された突帯紋土器文化圏が形成され、その影響下に於いて成立した粗大な工字紋を持つ土器群が、氷Ⅰ式の土器群の祖形となったとする見解（設楽1982）があり、晩期後半、西日本に分布する凸帯紋土器との関わりを認めるものには、これ以外に長野県御社宮司遺跡の調査成果（小林1982）などにも述べられている。

また、紋様の陽出技法に着目し、大洞BCからC₁式に位置づけられる亀ヶ岡式土器の中に、この技法が顕著に認められることから、これに系譜をもとめる考え方（田部井1985）がある。これは、後続する大洞A式土器では、沈線を紋様描出の基本としているものと捉える立場から、浮線紋とこれとの直接的系譜を認めず、工字紋、匹字紋の要素を受け入れていた特定地域が、在地に分布する土器型式に亀ヶ岡式土器の影響である陽出技法を採用し、浮線紋土器群を成立させたとする見解である。

浮線紋の細別に関しては、杉田遺跡の調査成果において、杉田D類土器の中に包括される浮線紋土器群が、杉田C類の特徴とする連続浮線楕円紋へと変化し、浮線紋の連結部に刻み目を施す段階を経て、つづく型式の沈線紋化し、三角形連繫紋と呼ばれる段階に移行することを示唆（杉沢・戸沢1963）する見解のほか、氷Ⅰ式土器群に少なくとも二段階程度の細かい変遷を考える意見（設楽1982）が見られる。これ以外の研究成果としては、ひとつには、浮線紋のモチーフの変遷と紋様構成から第1段階から第3段階に分類し、第3段階の浮線紋土器が荒海式土器に少量伴出していることから、浮線紋土器が大洞A'式の後半に位置づけられるとし、さらにこの土器には弥生土器が伴うという考え（中村1982）の提示がある。また、中部地方に分布する工字紋、浮線紋を持つ土器の器形と、浮線紋紋様の組み合わせの類別を行い、第1群から第3群の細分を提示し、これが即ち工字紋、浮線紋の1期から3期に該当すると述べた見解（石川1985）がある。この論考ではさらに、伊勢湾沿岸、近畿地方から出土した浮線紋土器の観察を行い、伊勢湾沿岸については、第2群土器と馬見塚式土器とを併行関係に置き、つづく第3群土器と檜王式土器とが接点を持つと位置づけ、本稿で取り扱おうとする近畿地方に関しては、第2群の新しい要素を持つ土器から第3群土器へと移行する時期の浮線紋土器を、長原式土器の時期と捉えた。そして東北地方の大洞式土器との関係については、論者が前半に位置づけられるとする第2群までを大洞A式併行とし、後半と位置づけた第3類を大洞A'式併行とする見解を示している。つぎには、関東、中部地方に分布する浮線紋の紋様に注目し、その変遷を系統づけることにより一類から五類の細別を行った論考がある。これは、関東・中部地方の編年との併行関係にまで論及し、氷Ⅰ式土器の中心部分が、第四類に当てはめられるという見解を述べた。東北地方の大洞式土器との併行関係では、一類から四類までを大洞A式併行とし、最後の五類を大洞A'式併行とする論を展開した（田部井1985）。

また、近畿地方から浮線紋土器に関する検討を行ったものとしては、近畿地方の縄紋時代晩期を三期に分け、さらに、その第三期を第一段階、第二段階a・b、第三段階に小区分し、浮線紋土器はその第三期、第二段階後半より共伴して出土するという見解を述べた論考（泉 1990）がある。ここでは、北部九州の板付Ⅰ式土器の成立を第二段階bの時期、畿内第Ⅰ様式が第三段階の末に成立したものと考えている。また、弥生土器からの紋様系譜を遡って浮線紋に論及したものには、流水紋の出自に対して、浮線紋を介在した形で工字紋にまでその源流を辿ろうとした見解（國分1989）が見られるが、後述するように近畿地方の浮線紋の最終段階においては、紡錘形浮紋一段のものから鋸歯状を呈する紋様構成を持つものが出土していることから最終段階の浮線紋との直接的関係は希薄であると考えたい。

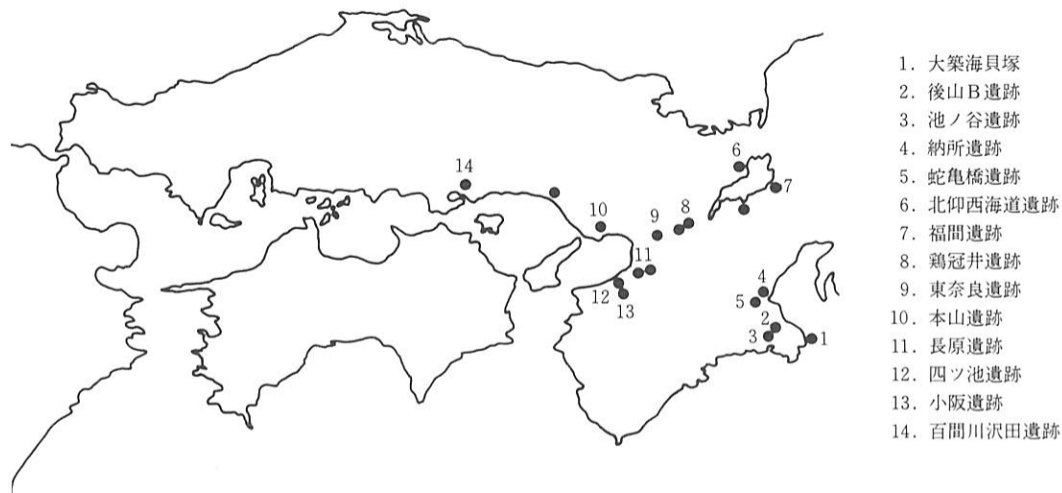


Fig.474 浮線紋（系）土器出土遺跡分布図

3. 近畿地方以西出土の浮線紋土器

これまでは浮線紋土器の系譜と細分についての研究成果を述べたが、ここでは資料収集を行った浮線紋土器に対し、出土状況、共伴遺物を詳細に検討し、先の研究成果に照らし合わせてみることにしたい。近畿地方周辺を含めた地域で浮線紋（系）土器が出土している遺跡は、東は三重県、西は岡山県までの17遺跡である。時期的には古く位置づけられる例から終末の段階までの例を含むが、遺構に伴った形で検出された資料は少なく、共伴した遺物から明確に時期を決定できる例も少ない。

納所遺跡〔三重県津市〕

浮線紋土器は、B・C・D・E・F・G地区の、第5層上面に形成された不定型な形状を呈する自然流水路より2点が出土している（伊藤1985）。この自然流水路は、安濃川の一支流とされるもので、埋土は基本的に二層に分けて報告されている。上層の茶褐色砂質土層からは、多条沈線紋を施した畿内第I様式新段階後半の土器が多量に出土し、下層の青灰色粘土層からは杭列が検出され、それと共に少量の縄紋時代晩期の土器、数多くの木製品、畿内第I様式中段階から新段階にかけての遺物が出土した。

2点の浮線紋土器は、下層の青灰色粘土層から出土したもので、双方とも浅鉢の破片である。大きな方の破片は、口縁部から直接紋様帯が開始されるもので、口縁端部には紡錘形浮紋を施し、2条の細線を加えている。体部には、平行してめぐらされる浮線紋間に狭長な紡錘形浮紋を施しており、関東に多く分布する紋様構成である。器形・紋様は、石川分類の器形B2に属し、c2の施紋が行われている。田部井分類では二類に属す。

小さな方の破片は、前者と同様、口縁端部から直接胴部に繋がる浮紋を施すもので、浮紋は紡錘形浮紋を千鳥形に複数帯めぐらせるものである。紡錘形浮紋の中央部には、平行してめぐらされる浮線が加えられる。南東北、関東、中部にかけての広い地域に分布する紋様である。器形・紋様は、石川分類では器形B2に属し、a3の紋様が施される。田部井分類では三類に含まれる。

蛇亀橋遺跡〔三重県一志郡嬉野町〕

屈曲した肩部から口縁部にかけての部位が遺存する浅鉢の破片に浮線紋が施される例が出土している（新田1982）。口縁部には2条の浮線をめぐらせ、肩部には狭長な眼鏡枠状浮紋を施す。石川分類の器形Aに紋様c1を施したもので、田部井分類では一類に属する。形態的には他の畿内から出土した浮線紋土器より確実に古い要素を持ち、共伴した遺物にも五貫森式土器が見られる。

3. 近畿地方以西出土の浮線紋土器

福岡遺跡〔滋賀県彦根市〕

石川氏が浮線文系（傍線筆者註）土器として紹介しているもので、1981年に調査された1トレンチ第6層とされる層位より出土し、晩期の凸帯文土器等と共に検出されている（本田1982）。土器は深鉢の破片で口縁部外面に沈線3条、内面に沈線1条をめぐらせ、口縁上端部は鋸歯状を呈している。

石川氏は、この土器を『本遺跡の突帯文土器は、「五貫森式」に酷似すると共に、彦根市という位置が、杉沢・川崎・尾上湖底といった湖北地方の馬見式土器分布地域に接していることは、その流入経路を示している。』（石川1985）と位置づけている。

鶏冠井遺跡〔京都府向日市〕

長岡京跡左京第82次（7ANEIS地区）～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次～の調査で、浅鉢の破片が出土している（山中・亀割1982）。出土地点は、第1トレンチ5AG区、河SD-8214、灰色砂礫層（下層）で、縄紋時代晩期長原式を主体とした滋賀里I式土器から、弥生時代畿内第II様式の遺物と共に混在して出土している。下層の灰色砂礫層が埋没した時期は、畿内第I様式中段階から第II様式とされる。浮線紋土器は、口縁部から体部の破片で、口縁部上端面に沈線1条を施している。口縁端部外面には凸帯がめぐり、部分的に細線が加えられる。体部には2本の平行浮線によって区画された面に一帯の湾曲の強い紡錘形浮紋が設けられ、その中をさらに5本の細線によって浮紋を形成している。上位の平行浮紋と紡錘形浮紋の接点部には、刻み目紋が施されている。この紋様パターンは、神奈川県、長野県に類例が認められる。器形・紋様については、石川分類の器形D、紋様ではc4に属し、田部井分類の四類となろう。

東奈良遺跡〔大阪府茨木市〕

浮線紋土器はII-A区の溝28から出土（奥井ほか1981）したもので、共に出土した遺物には、畿内第I様式中段階から新段階前半のものがある。土器は浅鉢の破片で、口縁部には細線が施されいくつかの単位で結束している。体部には曲線的な紡錘形浮紋の中に4本の細線を加え、紋様の結束部には刻み目紋が施されている。さらに下方にも浮線紋帯が続いており、上方と同様の紋様パターンが繰り返されるのか、平行の浮線が5条以上めぐられるのかは破片からでは判断しかねる。器形・紋様について、石川氏は湾曲の強い器形Cに紋様の構図b1あるいはc4が加えられたもの（石川1985）とし、田部井分類に従えば、下方の浮紋帯が平行にめぐるのなら三類、紡錘形浮紋中の細線の数に着目するのなら四類に属するものと見られるが、口縁部紋様帯から直接浮線紋帯につづくこと、細線の数が多いことから、後者の可能性が高いと考える。同様の紋様構成を持つ例は群馬県、長野県から出土している。

なお、この資料に関しては、森田氏が混入と見なしている（森田1989）が、私見としても、当遺跡ではこれまでの調査においてもほとんど凸帯紋を施す縄紋土器の出土が見られず、共に出土した遺物からも石川氏の指摘（石川1985）どおり、やや隔絶したものと考えられるため混入と考えたい。

長原遺跡〔大阪府大阪市〕

近畿地方縄紋時代晩期末の土器型式である長原式土器の標識遺跡となった長原遺跡より、ほぼ全形とわかえる浅鉢が出土している（永島・松尾1983）。浮線紋土器は長原遺跡（NG81-10・NG82-6次）の発掘調査において、第9層とされた黒紫色シルト質粘土を主体とした土層で検出され、同一層から出土した遺物には、多量の凸帯紋土器と微量の畿内第I様式中段階から新段階の土器がみられる。浅鉢の形態は、やや凹んだ底部から上外方に内湾しながらのびていく体部を持ち、口縁端部は欠損している。紋様は、口縁部外面端部に凸帯を1条めぐらせ、2条の平行浮線の間に狭長な紡錘形浮紋を2帯重

ねるものである。なお、内面には赤色顔料が付着していると報告されている。近似した紋様構成を持つものは、南東北、関東にある。浅鉢は、石川分類の器形Eに、紋様a4（d2二段？）が施されたもので、田部井分類では四類に近似した例が認められる。

四ッ池遺跡〔大阪府堺市〕

四ッ池遺跡からも浅鉢の出土（山中・亀割1982）が報告されている。出土した地点・層位は、H地区、砂礫層を中心とした堆積が見られる自然流水路内からで、同一層内からは縄紋時代晩期の土器と共に弥生土器が出土し、「壺形土器でみる限り、古段層を含む中段層が中心となって、新段階の前半（a形態）までの土器」（第2阪和国道内遺跡調査会1970a）の時期の遺物と共に検出されている。土器片には「口縁部に2個1組の局部圧痕列、頸部に浮線網状文」（第2阪和国道内遺跡調査会1970b）が施されると報告されている。紋様は口縁部に前記紋様が施され、体部には2本の浮線を平行にめぐらせている。さらにその間に紡錘形浮線を1段施し、浮線上には細線3条を加えている。同様の紋様を持つ例は群馬県、長野県より出土している。器形は断面図が公表されていないため明確ではないが、石川分類の器形Dに属するものとする。紋様は、石川分類のc4、田部井分類の四類に分類される。

小阪遺跡〔大阪府堺市〕

2点が出土しているが、いずれも遺構に伴ったものではない。体部の小片は、D地区灰褐色砂質土より出土し、縄紋時代晩期末の長原式土器、畿内第I様式中段階の土器と同一層位で出土（長谷川1987）している。この層上面に形成された自然流路からは、畿内第I様式新段階末の太・細併用の篋描き多条沈線紋を施す壺が出土している。口縁部が遺存する破片は、I地区の完新世段丘面基本層序第7層とした自然地形に堆積する緑灰色粘土層より出土している（三好・市本1989）。どちらの土器の胎土も、この遺跡で出土する凸帯紋土器の主流を占める生駒西麓産のもの、共に出土した畿内第I様式土器とも異なったものである。

体部の小片は、浅鉢の一部と考えられるが、口縁部が残存していないため形態は不明である。紋様構成は、平行にめぐる2本の浮線紋間に三角形の沈線を鋸歯状に配し、さらに三角形の長辺にあたる部分の中央部には大きな双頭突起が見られ、さらにその両側には細線が加えられる。反対方向の頂点部には、刻目目紋が施される。紋様は石川分類のeに近く、第3群と見られ、田部井分類では、五類に近似する。

口縁部が遺存する破片は、浅鉢の上半分から体部にかけてが遺存しており、I地区の第6面とした沼状の自然地形に堆積した層位から出土した。この層中には縄紋時代晩期末の長原式土器、畿内第I様式中段階新相の土器が包含されていた。紋様構成は、口縁端部外面に低い断面三角形の隆帯をめぐらせ、下方に幅の広い無紋帯をはさむものである。体部には、平行にめぐらされた2本の浮線紋間に狭長な三角形の浮線を鋸歯状に配し、各々の浮線上には細線が加えられ、さらに浮線の結節部には円形の刺突紋が施されている。器形・紋様については石川分類の器形Dに該当し、紋様はeに近似したものとなる。田部井分類に従えば五類に分類される中に含まれると考える。

以上の2点の土器の紋様構成は、関東から、中部地方にかけて広範囲に分布していることが指摘されており、後者については、群馬県、長野県より近似した例が報告されている。

本山遺跡〔兵庫県神戸市東灘区〕

自然流路内より浅鉢の口縁部から体部の破片が出土している（南 1984）。土器はこの流路最下層（第4層）とされた砂層と有機分の高い黒色砂混じり粘質土から出土したもので、縄紋時代凸帯紋土器、畿内第I様式中段階から新段階を中心とした遺物と共に検出された。また、この上部の下層と報告され

3. 近畿地方以西出土の浮線紋土器

る層中からは、畿内第Ⅰ様式を主体として畿内第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の遺物が出土している。土器は上下2本の平行にめぐらされる浮線の間に、ゆるやかに屈曲する紡錘形浮線紋を施すもので、紡錘形浮線紋の中央部には、2本の細線により陽出された横方向の浮線がみられる。同様の紋様構成を持つ土器は、南東北から関東・中部地方にかけての広い地域に分布している。石川分類では器形Eに分類され、紋様はa3となるが、紋様の特徵からその中でも新しい傾向を持つとされる。田部井分類では三類に近似する。

百間川沢田遺跡〔岡山県岡山市〕

同一個体の可能性が考えられる浮線紋を施した浅鉢の小片4点（岡田・中野1984）が出土している。土器が出土した地点は、百間川沢田遺跡2、高縄手B調査区の微高地上、210Q区、210R区の北辺境界

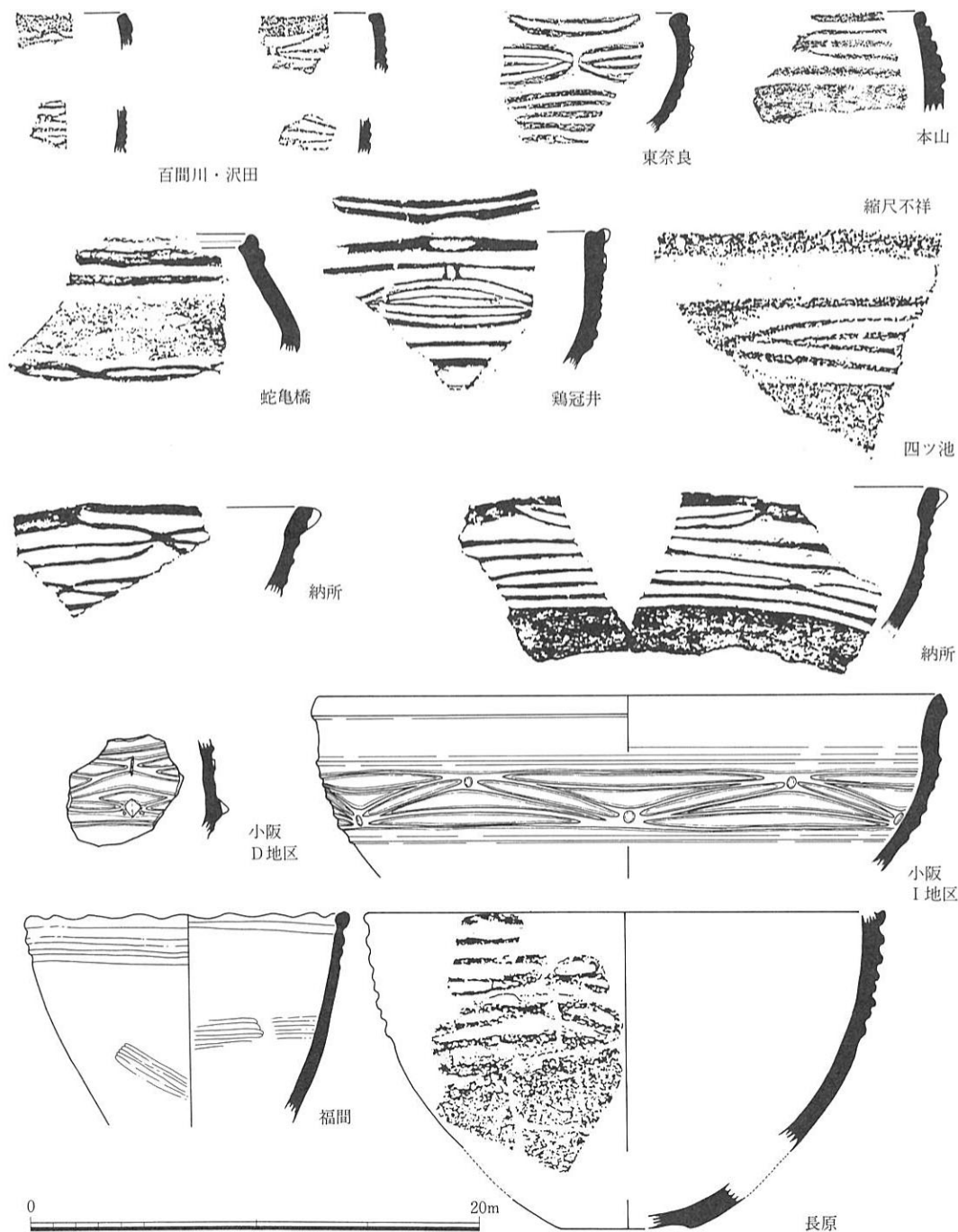


Fig.475 西日本出土の浮線紋（系）土器（各報告書より引用、一部改変）

付近で検出された土器溜り-13とされた遺構からである。この遺構の埋土は木炭細片、焼土片、焼土塊を含む黄褐色を基調とした微砂質土層である。遺物の出土状態からは、居住域の近辺に形成された可能性が指摘されている。共伴した遺物は、近年提唱された中部瀬戸内地方の縄紋晩期終後半の土器型式である沢田式土器の基準資料となるものであり、さらにこの遺構上には、畿内第Ⅰ様式中段階に併行すると考えられる遺物を包含する土層が堆積し、資料的価値を確実なものとしている。

出土した浮線紋土器は小片のため判然としないが、口縁部から体部にかけての部位が遺存し、紋様は菱形を呈する浮線の長軸に対し、平行浮線をめぐらすものと考えたい。また菱形浮線の長軸と平行浮線の結束部には刺突紋が施される。同様の紋様は、茨城県、新潟県に類例がみられる。器形は口縁部紋様帯を欠いていることから、石川分類の器形Eに相当し、紋様はb3となる。田部井分類では四類に属す。

以上、西日本出土の浮線紋（系）土器の紹介をおこなってきたが、上記以外にも、詳細は不明ながら次に掲げる諸遺跡で浮線紋土器が出土している。

- ・大築海貝塚 三重県鳥羽市答志町大築海貝塚（立教大学博物館学講座ほか1966・紅村ほか1987）から2点が出土している。石川氏は第2群に分類している（石川1985a）。
- ・池ノ谷遺跡 三重県多気郡勢和村池ノ谷遺跡から弥生時代前期に属する土器と共に表面採集資料（奥1987）が確認されている。
- ・後山西B遺跡 三重県多気郡大台町後山西B遺跡から表面採集（奥1987）されている。
- ・北仰西海道遺跡 滋賀県今津町北仰西海道遺跡から、浅鉢の破片2点が出土（葛原1987）している。

4. まとめ

西日本における浮線紋土器についてその類例を述べたが、それらに対し、石川・田部井分類の比較・検討を行い、各地域における土器型式の中の位置づけについて検討したい。まず最初に、西日本出土の浮線紋土器に対し、その前後関係について分類と対照させながら検討を加えたい。

前提として問題になるのは、石川・田部井分類の相対的関係である。浮線紋に対する系譜論が両者ともに異なるため、矛盾を生じることは明白であるが、大洞式土器からの捉え方を勘案し、工字紋を持つ石川分類第1群をここでは浮線紋土器群とし、また、紋様の変遷から勘案した両者の対応関係を検討して、大系的に石川分類第1群が田部井分類二類に、石川分類第2群が田部井分類三類に相当するものとして考え、さらに、氷Ⅰ式土器に対する両者の見解を考慮して、石川分類第3群を田部井分類四類から五類に相当するものとして暫定的に捉えて考えていくこととしたい。

まず、西日本出土の浮線紋土器の中で、最も古く位置づけられると考えられるのは、蛇亀橋遺跡出土の浅鉢である。石川分類では器形的には古い要素をもつが、紋様を根拠に第1群ないし第2群に含まれると述べられ、田部井分類では一類に属する。共伴した土器を見た場合、五貫森式土器とともに出土していることから、近畿地方周辺部の出土例では最も古く位置づけられるものではないかと考えたい。

つぎに納所遺跡の例がつづく。小片の方は、田部井分類の紋様構成では古い段階に該当するが、紋様が施される位置に注目した場合、肩部と体部の区別が不明瞭となっていることや、器形に注目した場合でも共伴したもう1点の土器とほぼ同じ形態を呈すると考えることから、石川分類第2群、田部井分類三類に属するものと考え、これらの中でも古い段階に位置づけられるものと捉えたい。

同様の紋様構成を持つが、器形に注目してやや時期が下ると位置づけられるものに本山遺跡出土例があげられる。本例は、紋様構成に注目するならば、田部井分類では納所遺跡出土例と同時期となるが、口縁部紋様帯が省略され、体部最下段の浮線もやや沈線に近い状態となっており、石川氏が紋様のモチー

4. まとめ

フの観察から新しく位置づけられると指摘するように、納所遺跡出土例よりも後出する第2群でも新しい要素を持つものと見なしたい。

続くものには百間川沢田遺跡出土例がある。これは紋様が小片のため不確定な要素を多分に残すが、紋様を見た場合、石川分類のb3に近似していることがうかがえる。器形Eに紋様b3が組み合わさる例は論考では示されていないが、口縁部紋様帯を欠く器形Eが、器形Bからの発展形態として後出的要素を持つ器形と考えた場合には、第2群の中でも末葉に位置づけることが可能となる。田部井分類に該当させるならば、長原遺跡出土例とほぼ同時期の四類に属し、これは、先の考えを支持しているものと考えたい。

これとほぼ同時期か後出するものに長原遺跡出土例が見られる。紋様が不明瞭なため石川分類の紋様c2二段と考えるならば第2群に、a4に対応するならば第3群に分類されるが、器形Eに分類されることから、これもさきほど示した器形変化として理解すれば、第2群の新しい部分から第3群の中でも古相を示すものと考えられ、石川分類との齟齬をきたさない。また、田部井分類に対照させて考えた場合でも、百間川沢田遺跡出土例とほぼ同時期か、後出するものと見なすことが可能である。

さらにこれにつづく例として東奈良・鶏冠井・四ッ池遺跡出土例がある。これらの特徴としては、口縁部と体部の間に存在する無紋帯が先の諸例よりも広くなっていることをあげうる。以上の例はほぼ同時期のものと捉えられるが、東奈良遺跡出土例が石川分類の器形Cに紋様c4の可能性が高い紋様を施す点でやや古い傾向といえるが、それ以外は、器形Dに紋様c4を施すもので共通する。田部井分類では、これらを一括して四類の終わり頃に分類することとなり、石川分類では、平行浮線と紡錘形浮紋が接する部分に紋様を持つ一群が設定されているため、第3群に相当するものと考えられる。しかし、口縁部と体部の無紋帯の間隔からすれば、四ッ池遺跡出土例の方がより後出的要素が強いものとなる。

最終段階には小阪遺跡出土の浮線紋土器があげられる。特にI地区出土例は、口縁部紋様帯が凸帯1条となり紋様は施されない。そして、口縁部と体部の無紋帯は東奈良・鶏冠井・四ッ池遺跡出土例よりさらに広がる傾向が見られる。体部の紋様も、鋸歯状に配した中に細線を加えるだけのものとなり、簡略化される傾向が看取されよう。石川分類でも第3類の器形Dとこの紋様が組み合わさる例があげられ、田部井分類では五類と位置づけていることから、浮線紋の最終段階に属するものと考えたい。

以上に西日本出土の浮線紋土器に対しての型式的位置づけを行った。それでは、これらのうち時期決定を行いうる共伴資料の明らかなものについての検討を加えることとしたい。

まず、出土状況に関して層位的に一定の信頼が持てるものとして、百間川沢田、長原、小阪遺跡出土例があげられる。これらと共伴する遺物に関しては、百間川沢田遺跡より中部瀬戸内における縄紋時代晩期末の沢田式土器がみられることは先述した。長原遺跡では、一部畿内第I様式の土器が共に出土する形で、近畿地方縄紋時代晩期終末の長原式土器が検出されている。小阪遺跡I地区では、長原式土器と共に畿内第I様式の頸部と体部に不明瞭な段を持つ壺、体部上方に沈線2条と段を組み合わせた甕などが検出されており、畿内第I様式中段階新相を示す土器が出土している。さらに、D地区の成果から畿内第I様式新段階末以前に浮線紋土器が伴うことが一つ事実として確認されている。

上記の出土状況に比較的信頼度がもてる浮線紋土器を検討した結果、蛇亀橋遺跡出土例を第1群土器と見なし、百間川沢田遺跡より第2群末葉の土器、長原遺跡より第2群から第3群の土器、小阪遺跡I地区より第3群末の土器が出土していることとなり各々の相互関係が導きだされる。混在して出土している西日本の他の浮線紋土器に関しても、以上の観察結果と照らし合わせると、納所遺跡出土例が第2群の古い段階と考えて畿内縄紋時代晩期の船橋式の時期に、第2群の本山遺跡出土例が畿内船橋、長原

式段階に、紡錘形浮紋を持ち第3群に属する東奈良・鶏冠井・四ッ池遺跡出土の諸例は、縄紋時代晩期末から畿内第Ⅰ様式初頭以前へと、おのずとそれぞれの相互関係が導き出されることとなる。

東に目を転ずれば、先に述べたように蛇亀橋遺跡出土の第1群土器が五貫森式土器と共に出土し、また、馬見塚式土器と第2群土器が併行関係にあり、樫王式土器と第3段階の土器が接点を持つ（石川1985a）とされる。そして、各地のこれまでの研究成果の蓄積を検討した結果、浮線紋土器を媒体として近畿地方と各地域との関係を連鎖的に辿れば、大局的にTab.95に示すような様相を示す結果となった。

以上が、西日本出土の浮線紋土器の資料収集を行った結果から導き出された結論である。大方の御批判、御叱声を賜りたい。
(1991年5月31日成稿)

Tab.95 縄紋時代晩期から弥生時代前期編年対応関係試案

分類	地方	東北	越後	関東		中部	東海 (伊勢湾沿岸)	近畿	中部瀬戸内	北部九州
				北・西部	東・南部					
石川1985a	田部井1985									
	C ₂ 一類 C ₂	大洞 C ₂	上野原	安行Ⅲ d	杉田Ⅱ C類	+	西ノ山	鬼塚H地点	前池 (黒土BⅡ)	長行
第1群	二類 A	大洞 A	鳥屋Ⅰ	古		+	五貫森	口酒井15次 ●蛇亀橋		山ノ寺
第2群	三類 A		鳥屋2a	干綱Ⅰ	杉田Ⅲ D類	(樋口五反田)	馬見塚	船橋 ●納所 滋賀里V ●本山	沢田	夜白Ⅰ
第3群	四類 A'	大洞 A'	鳥屋2b	新		氷Ⅰ	樫王	●長原 ●東奈良 ●鶏冠井 ●四ッ池 第Ⅰ様式 古・中段階	●百間川沢田	夜白Ⅱ 板付Ⅰ
	五類 A'							●小阪	津島	
		砂沢	緒立	干綱Ⅱ	荒海	+	水神平Ⅰ	a 第Ⅰ様式 新段階 b	門田	板付Ⅱ
						氷Ⅱ (新井南)				

※右側のラインは両氏の大洞式土器に対する併行関係を示す

十は相当する土器が検出されているが型式名称が設定されていないもの

※ 本稿は、財団法人 大阪文化財センター研究助成金の交付を受け、平成元年度研究助成 個人研究『浮線網状紋出土遺跡の資料収集』の成果を骨子として作成したものである。

引用・参考文献

- 愛知県考古学談話会 1985 『<条痕文土器>文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—』資料編Ⅰ
- 石川日出志 1985a 「中部地方以西の縄文晩期浮線文土器」『信濃』第37巻 第4号 信濃史学会
- 石川日出志 1985b 「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本原史』 論集日本原史刊行会
- 石川日出志 1988 「第一節 土器」『鳥屋遺跡Ⅰ・Ⅱ—新潟県豊栄市鳥屋遺跡発掘調査報告—』 豊栄市史編集委員会・豊栄市教育委員会・鳥屋遺跡発掘調査団
- 石川日出志 1991 「縄文時代晩期浮線文土器出現期の編年と諸様相 —新潟市村尻遺跡B区資料紹介を兼ねて—」『北越考古学』第4号 北越考古学研究会

- 泉 拓良・家根祥多 1982 「縄文時代の終末」『日本歴史地図』原始・古代編（上） 柏書房
- 泉 拓良 1986 「縄文と弥生の間に」『歴史手帖』14巻4号 名著出版
- 泉 拓良 1990 「西日本凸帯紋土器の編年」『文化財学報』第八集 奈良大学文学部文化財学科
- 伊藤久嗣 1980 『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県埋蔵文化財調査報告35—1 三重県教育委員会
- 岡田 博・中野雅美 1985 「高縄手B地区」『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2 旭川放水路百間川改修工事に伴う発掘調査』VI 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会
- 奥 義次 1978 「原始社会」『大宮町史 歴史篇』大宮町
- 奥 義次 1990 「三重県における凸帯文土器出土遺跡の分布相」『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会
- 奥井哲秀・井上直樹・宮脇 薫・大野恵三子・石田治雄・高田敬子 1981 『東奈良発掘調査概報』II 東奈良遺跡調査会
- 金関 恕・佐原 眞 1986 『弥生文化の研究』3 弥生土器I 雄山閣出版株式会社
- 金関 恕・佐原 眞 1987 『弥生文化の研究』4 弥生土器II 雄山閣出版株式会社
- 葛原秀夫 1987 「北仰西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第7集 今津町教育委員会
- 紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡』総括編 名古屋鉄道株式会社
- 紅村 弘 1986 「中部日本」『弥生文化の研究』3 弥生土器I 雄山閣出版株式会社
- 紅村 弘 1987 『西日本・中部日本における弥生時代成立論』
- 紅村 弘・増子康真・山口 克・和田英雄 1987 『東海先史文化の諸段階』資料編II
- 國分政子 1989 「弥生土器地域論—畿内第II様式の系譜をめぐって—」『滋賀考古』第2号 滋賀考古学研究会
- 小林秀夫 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5・御社宮司遺跡—』長野県教育委員会
- 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻 第4号 信濃史学会
- 杉原莊介・戸沢充則 1963 「神奈川県杉田遺跡および桂沢遺跡の研究」『考古学集刊』第二巻 第一号 東京考古学会
- 須藤 隆 1987 「東日本における弥生文化の成立と展開」『弥生文化の研究』4 弥生土器II 雄山閣出版株式会社
- 第2 阪和国道内遺跡調査会 1970a 『第2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書』3
- 第2 阪和国道内遺跡調査会 1970b 『第2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書』4
- 田部井 功 1985 「縄文晩期・浮線文土器の研究—文様の構造と系統について—」『古代探叢—早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集—』早稲田大学出版部
- 中島栄一・渡辺朋和 1989 「浮線網状文系土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 永島暉臣・松尾信裕 1983 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告III—(仮称)大阪市立第8 養護学校建設に伴う発掘調査報告書—』(財)大阪市文化財協会
- 永峰光一 1969 「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9 石器時代文化研究会
- 中村五郎 1982 『畿内第I 様式に並行する東日本の土器』
- 中村五郎 1986 「東日本」『弥生文化の研究』3 弥生土器I 雄山閣出版株式会社
- 中村五郎 1988 『弥生文化の曙光 縄文・弥生文化の接点』未来社
- 西村正衛・馬目順一郎・原 信之・戸田 健・江崎 武・平野吾郎・大久保 進 1965 「関東における縄文式最後の貝塚—千葉県成田市荒海貝塚—」『科学読売』第17巻 第10号 読売新聞社
- 新田 洋 1982 「一志郡嬉野町蛇亀橋遺跡」『昭和56年度県営園地整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会
- 日本考古学協会編 1961 『日本農耕文化の生成』東京堂出版
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987 『小阪遺跡(その4)—調査の概要—』
- 平井 勝 1988 「岡山における縄文時代晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集
- 平井 勝 1989 「縄文時代晩期における中・四国の地域性」『考古学研究』第36巻 第2号 考古学研究会
- 福井県 1986 『福井県史』資料編 第13 考古 本文篇 福井県史編纂委員会
- 本田修平 1982 『福満遺跡—発掘調査概要報告書—』彦根市埋蔵文化財調査報告 第4集 彦根市教育委員会
- 増子康裕 1965 「尾張平野における縄文時代晩期後半期の編年的研究」『古代学研究』第40号 古代学研究会
- 南 博司 1984 『神戸市東灘区本山遺跡発掘調査報告書』財団法人 古代学協会
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡(南その1)—調査の概要—』
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1990 『小阪遺跡(南その2)—調査の概要—』
- 森田克行 1989 「三島地方の縄文土器」『高槻市文化財年報 昭和61・62年度』高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター
- 山崎純夫 1980 「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
- 山中 章・亀割 均 1982 「鶏冠井遺跡第2次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第10集 向日市教育委員会
- 立教大学博物館学講座ほか 1966 「大築海貝塚の発掘調査」『ムゼイオン』12号 立教大学博物館学講座